

就職活動における葛藤と適応のプロセスに関する文化心理学的考察

堂前 ひいな

現代社会は激しい変化にさらされており、今まで当たり前だと思われていた価値観が揺らいでいる。その変化の中で、特に若者はどのように社会に順応していくかを考えることに葛藤や不安を感じていると考えられる。

本研究では、グローバル化による個人主義化に代表されるような変化の渦中にある日本社会において、就職活動というプロセスの中で若者がどのように葛藤と適応を経験しているのかを文化心理学的に考察することを目的とした。加えて、就職活動におけるプロセスを通してグローバル化する日本社会の変化がもたらす人々の心理的影響について考察し、社会情勢というマクロな文脈と其中の人々の心の変化というミクロな視点をつなげることを目指した。

調査方法は、一般企業への就職活動を行い、就職先を決定した大学4年生、修士2年生の計 11 名に半構造化インタビューを行い、その逐語記録を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) によって分析した。その結果、自分のことがわからないという状況や将来像が見えていない状況は、就職活動に不安やストレスをもたらし、それらが明確化していくことが就職活動の満足感・納得感に大きく寄与していることが明らかとなった。また、学生は、その不安感や選考過程で生じるその他のストレスに対して様々な対処行動をとっており、それらが将来像の明確化につながるというプロセスも示唆された。さらに自己と向き合い、アピールする過程では、自分と他者や文脈との関係性を全体的に捉えようとする、そしてそれと同じような状況や他者との関係性が築くことができそうな環境はどこなのかということを探ること、これによって自分にとって納得感のある環境を見つける就職活動につながるのではないかと結論づけられた。

以上のことから若者は、「個人の自由」に重きが置かれ、多様化した選択肢の中から主体的に意思決定を行うことが重視されることでむしろ葛藤や不安を感じているが、そこで意思決定を諦めるのではなく、手探りながらも前に進もうとしていることが明らかとなった。また、現代の日本社会では他者との関係性に縛られるのではなく、様々な関係性の中で自己の在り方を自ら模索していくことが可能になってきた。したがって、今ある関係性から無理のない自己の在り方を模索し、未来について考える際はそれを基盤に自分が自分らしく振る舞うことができ、適応できる環境や関係性を模索していくことが葛藤や不安を乗り越える鍵になるのではないかと示唆された。(環境行動学)